

プラトン自然学の始まり（上）

——『パイドン』の内にアリストテレスが見たものと見過したのもの——

金 山 弥 平

I. アリストテレスが見たもの

アリストテレスは『形而上学』第1巻9章991b3-9、および『生成消滅論』第2巻9章335b5-24において、プラトン『パイドン』95e-107bを念頭に置きつつ、次のような批判を展開する。

(MA) (1)『パイドン』の中では次のように語られている——諸々のエイドス¹⁾は「ある」と「生成する」の両方の原因である。(2)しかし、エイドスが存在しても動かすものがなければ、分有するものは生成しない。(3)また家や指輪のように、我々がそれらについてエイドスは存在しないと語っている他の多くのもも生成する。(4)したがって明らかに、その他のものもまた、今言及したものがそれによって存在し、生成するようなそのような諸原因のゆえに存在し、生成するのである（『形而上学』第1巻9章991b3-9）。

『形而上学』第13巻5章1080a2-8にもほとんど同じ言葉づかいで同様の批判があるが、(2)において「分有するものは」が記されていないのに加え、(3)と(4)の部分に、「我々」が「彼ら」に変更されているのを始めとして次のような実質的相違がある²⁾。

(MM) (3')また家や指輪のように、彼らがそれらについてエイドスは存在しないと言っている他の多くのもも生成する。(4')したがって明らかに、エイドスが存在すると彼らが言っているものもまた、今言及したものがそれによって存在し、生成するようなそのような諸原因のゆえに存在し、生成するのであって、エイドスのゆえではないのである（1080a4-8）。

『生成消滅論』の批判は次のとおりである。

(GC) (1)したがって、これは生成しうるものにとって素材（質料）としての原因であるし、他方、目的としての原因は、形（形相）、すなわちエイドス（形相）である。後者は、それぞれの事物の実体を説明するロゴスである。(2)しかしそれに加えて、第三の原理もなければならぬ。それは万人が夢のようにおぼろに見てはいるが、だれも語ってはいないものである。(3)

いやむしろ、ある人たちは、生成の原因としては諸々のエイダスの本性で十分であると考えた——ちょうど『パイドン』のソクラテスがそうであるように。(4)というのも、彼は、何も語っていないとして他の人々を非難した上で、次の仮説を立てているのである——(4a)諸々のあるもののうち、あるものはエイダスであり、他のものはエイダスを分有するものである、(4b)またそれぞれのものは、エイダスのゆえに「ある」と言われ、また分取 (metalêpsis) のゆえに「生成し」、放棄のゆえに「消滅する」と言われる。(5)それゆえ、もしもこれらのことが真であるなら、必然的に諸々のエイダスが生成と消滅の原因であると彼は考えているのである。

(6)他方、別の人たちは、生成の原因としては素材(質料)そのもので十分であると考えた。というのも、彼らによると、動は素材(質料)に由来して存在するからである。

(7)しかし、どちらもよくは語っていない。というのも、もしも諸々のエイダスが原因であるとするなら、なぜそれらはつねに連続して生み出すことなく、あるときには生み出し、別のときには生み出さないのであろうか——エイダスも分有するものもつねにあるのに。(8)それにまた我々の観察では、いくつかの場合には別のものが原因である。健康をもたらすものは医者であるし、知識をもたらすものは知識所有者である——たとえ健康そのものも、知識そのものも、諸々の分有するものも存在するとしても。同様のことは、能力のゆえになされる他の諸々の物事にも当てはまる(『生成消滅論』第2巻9章335b5-24)。

『生成消滅論』では、アリストテレスはさらに素材(質料)を生成の原因とする人たちにも批判を加える。本論文の後の議論に関係するのでこの部分も以下に訳出する。

(GC) (9)他方、もしも素材(質料)が動のゆえに生み出すと言う人がいるとすれば、その人は、先のように主張する人たちより、より自然学的に語っているのであろう。(10)というのは、性質を変化させ、形を変化させるものの方が、よりいっそう生み出す原因となるからである。(11)そして我々は、あらゆるものにおいて——自然的なものにおいても、技術によるものにおいても同様に——動かすもの(それが何であれ)が作用を及ぼすものであるとつねづね言っている。(12)しかしなお、この人たちも正しくは語っていない。というのも、素材(質料)に属しているのは、作用を受けること、動かされることであって、動かすこと、作用を及ぼすことは別の能力に属するからである(このことは、技術によって生じるものについても、自然的に生じるものについても明らかである。というのは、水それ自体が、それ自身に基づき動物を作るのではないし、木材それ自体がそれ自身に基づき寝椅子を作るのでもなく、作るのは技術だからである)。(13)したがって、彼らもこの理由により正しくは語っていないのであるが、それはまた次の理由にもよる——彼らは、より本来的な(より力ある)原因を見過ごしている。というのも彼らは、本質、すなわち形(形相)を排除しているからである(335b24-35)³⁾。

以上の批判(特に『生成消滅論』における批判)については、解釈者の間でいくつかの誤解があるように思われる。

第一に、Annas は次のように言う。‘In both passages Aristotle is saying that in the *Phaedo* Forms are put forward by Plato to be what are in Aristotle’s terms “efficient causes”, sources of change or movement.’⁴⁾しかし、アリストテレスがプラトンのアイデアを作動因として解していることを示唆する箇所は上記の批判のどこにも認められない。むしろ逆に、(MA2)「エイダスが存在しても動かすものがなければ、分有するものは生成しない」、(GC2-3)「(素材(質料)とエイダス(形相)に加えて)第三の原理(作動因)もなければならぬ。それは(『パイドン』のソクラテスも含めて)だれも語ってはいないものである」という発言は、アリストテレスが、アイデア(エイダス)を作動因として理解していないことを示唆する。したがって、アリストテレスが『形而上学』第1巻6章ではプラトンのアイデアを作動因として認めない反面、冒頭に引用した9章では作動因として意図しているという Annas が認めるような矛盾は存在せず、したがってまた、彼女が行なうような矛盾解決の試みも不要である⁵⁾。

第二に、(GC5) (335b15-16) を、例えば H. A. Joachim, *The Works of Aristotle Translated into English*, vol. II (Oxford, 1930) は次のように訳す⁶⁾ — Hence he thinks that ‘assuming the truth of these theses, the Forms must be causes both of coming-to-be and of passing-away’. また彼はこの箇所に関して、その註釈書において次のようにも言う — Aristotle is still paraphrasing the *Phaedo*. Socrates (cf. 99e-100b, 101d-e) thinks that ‘provided his *hypotheses* are sound’ (b15 *tauta*, sc. the doctrines which Aristotle has just summarized from the *Phaedo*) it ‘necessarily follows that the Forms are causes of *genesis* and *phthora*’⁷⁾. この解釈によれば、ソクラテスが、(GC4a) 諸々のあるものうち、あるものはエイダスであり、他のものはエイダスを分有するものである、(GC4b) またそれぞれのものは、エイダスのゆえに「ある」と言われ、また分取のゆえに「生成し」、放棄のゆえに「消滅する」と言われる、という二つの仮説を立てた後、そこからアイデアが生成と消滅の原因であると結論づけたのは、アリストテレスが『パイドン』の論述(そのパラフレーズが(GC4a) (GC4b) の二つの仮設の部分である)に基づいて推論した事柄ではなく、(GC4a) (GC4b) 同様『パイドン』の議論のパラフレーズであることになる。しかし、(GC5) (335b15-16) を Joachim が訳したように訳すこと、また、『パイドン』のソクラテスが、アイデアを生成および消滅の原因と認定していると考えすることは正しいであろうか。

まず (GC5) (335b15-16) のテキストそれ自体は、次のような翻訳も許す表現である⁸⁾。

- (i) Hence if these things are true, he thinks that the Forms are necessarily causes both of coming-to-be and of passing-away.
- (ii) Hence if these things are true, he necessarily thinks that the Forms are causes both

of coming-to-be and of passing-away.

- (iii) Hence he necessarily thinks that assuming the truth of these theses, Forms are causes both of coming-to-be and of passing-away.
- (iv) So if this is true, the forms, he thinks, are necessarily the causes of both generation and corruption.

我々としてはいずれかの訳に決定するつもりはない。ただいずれを採用するにせよ、この箇所において、アリストテレスが『パイドン』をパラフレーズしていると言うことはできないように思われる。なぜなら、「それゆえ…彼は考えている」、あるいは (iv) 「それゆえ、もしもこれらのことが真であるなら、(彼の考えでは) 必然的に諸々のエイダスが生成と消滅の原因であることになる」という言葉は、これが『パイドン』のパラフレーズであるよりは、(GC4a) (GC4b) からのアリストテレスの推論であることを示唆するからである。

第二に (GC3) の「生成の原因としては、諸々のエイダスの本性で十分である」という見解についても、アリストテレスはそれを、(少なくとも『生成消滅論』においては) 無条件に、何の説明もないまま、ソクラテスに帰しているわけではない。彼は (GC4) において、「というのも」という言葉で書き始めることにより (GC3) の説明を行なっている。また『パイドン』のパラフレーズと呼ぶにふさわしい (GC4) では、アイデアを「ある」の原因とはみなすが、(GC3) のように「生成の原因」と認めることはせず、「生成の原因」としてはむしろアイデアの分取を挙げているだけなのである。

ただしかし、第二の点を確言するつもりはない。なぜなら、(MA1) において彼は、『パイドン』において、諸々のエイダスは「ある」と「生成する」の両方の原因であると言われている、と述べているからである。また、『パイドン』101c——ソクラテスが、「それぞれのものは、それが何を分有するにせよ、その分有する当の相手の固有のあり方を分有することによって生成する」と語る箇所——に基づき、プラトンは、アイデア、あるいはアイデアへの分有を生成の原因とみなしたという解釈は、現在でも行なわれているところである⁹⁾。だとすれば、現在の解釈者同様、アリストテレスが、アイデアを「ある」の原因のみならず「生成する」の原因ともみなす立場を、『パイドン』の内に明瞭に表現されたものとして読み取ったとしてもなにも不思議はないように思われる。

以上の考察を踏まえ、アリストテレスによる『パイドン』のパラフレーズ、およびそこから彼が推論した事柄、さらにはそれに基づいて行なうアイデア原因論批判について、我々は、これから論じようとする点も含め、本論文の立場として次のように主張したい。

(P1) (GC4a) 「諸々のあるもののうち、あるものはエイダスであり、他のものはエイダスを分有するものである」、および (GC4b) 「またそれぞれのものは、エイダスのゆえに『ある』

と言われ、また分取のゆえに『生成し』、放棄のゆえに『消滅する』と言われる」は、『パイドン』アイデア原因論のアリストテレスによるパラフレーズである。そして、アリストテレスがアイデア原因説をこのような形で整理したのは正しい。

(P2) (GC5)「諸々のエイダスが…消滅の原因であるとソクラテスは考えている」は、このパラフレーズに基づくアリストテレスの推論にすぎない。アイデアを消滅の原因とみなす立場を、アリストテレスが自らの推論として記し、『パイドン』のパラフレーズに含めなかった点も正しい。

(P3) (GC3)「生成の原因としては諸々のエイダスの本性で十分であると(ソクラテスは)考えた」、また(MA1)「諸々のエイダスは『ある』と『生成する』の両方の原因である」については、これがアリストテレスのパラフレーズであったか、あるいは推論の結果であったかは不明である。『パイドン』101cに基づき、アリストテレスがアイデアを生成の原因とみなしてよいと考えた可能性は十分ある。

(P4) しかしいずれにせよ、(GC3) および (MA1) において彼が、アイデアを生成の原因とみなす立場をソクラテスに帰しているのは正しくない。つまり、101cの記述にもかかわらず、プラトンは——アイデアの分取が生成の原因であることは認めるものの(この点でアリストテレスのパラフレーズ(GC4b)は正しい)——、アイデアそれ自体が生成の原因であるとは認めないのである。

(P5) アリストテレスは、(MA2)「エイダスが存在しても動かすものがなければ、分有するものは生成しない」と言って、プラトン批判を展開するが、この批判点であればプラトンは積極的に正しいと認めるであろう。また、(MA4) (MM4')「エイダスが存在すると言われるものも、家や指輪がそれによって存在し、生成するような諸原因のゆえに存在し、生成するのであって、エイダスのゆえにではない」については、プラトンは「そのような諸原因のゆえに生成し、エイダスのゆえにではない」という点は認めるが、「存在」に関するエイダス(アイデア)原因性の否定は容認しないであろう。またアリストテレスが他の箇所でもアイデア原因論に下す次のような評価についても、生成、変化、動に関する限り、プラトンはそれを正しいとみなすであろう——「アイデア論者は、アイデアを動(変化)の原理とはみなしていない(むしろ不動の原因、静止状態の原因であると言っているから)¹⁰⁾(『形而上学』第1巻7章988b2-4)、「アイデアは感覚的諸事物にとって、動の原因でも変化の原因でもない」(第1巻9章991a11=第13巻5章1079b14-15)、「永遠の存在であるアイデアは、変化を引き起こす原理が別に与えられなければ役に立たない」(第12巻6章1071b14-17)、「アイデアは動(変化)の原因たりえない」(第12巻10章1075b27-28)。

(P6) しかし、例えば「アイデアは動(変化)の原因たりえない」をプラトンが認めるとしても、それはあくまでも「直接の原因たりえない」という意味においてである。何かあるものXがFになる(Fへと生成する)場合に、その生成の結果(目的)として「XがFである」こと

の原因は、アイデアFである。その意味でアイデアも間接的には (i.e. 動(変化)の結果(目的)としては) 動(変化)の原因である。しかし、アリストテレスが言っている「永遠の存在であるアイデアは、変化を引き起こす原理が別に与えられなければ役に立たない」ということは、プラトンにとって正しく、彼はそのことを容認するであろう。我々は本論文においてそのことを示し、『パイドン』を正確に読むなら、プラトンは変化を引き起こす原理をアイデアとは別に与えている、ということが知られると論じたいと思う。

上記のまとめにおいて最も異論を呼ぶのは (P4)、およびそれに随伴する (P5) (P6) であろう。そこで (P4) の正当性を示すための準備作業として、アイデア原因が「ある」「生成する」「消滅する」に対してもつ関係を中心に、『パイドン』95e-107b の議論をまとめてみよう。

II. プラトンが『パイドン』で述べていること

以下、プラトン原因論の解明のために役立つと思われる箇所をテキスト順に拾っていく。‘G’は genesis (生成)、『F’は phthora (消滅)、『E’は einai (ある・存在する) を表わす。また「生成(あるいは消滅)する」という言葉が用いられなくても、「あった」「あるであろう」が、それらと異なる現在の状態と比較される箇所も、「生成(あるいは消滅)」を読み込んで不自然でないかぎりにおいて拾う。einai の訳語として、「存在する」でなく「ある」を用いたのは、「ソクラテスが小さい(小さくある)」という事態も、「ある」によって表わされるからである。その意味で、「生成」は、例えば「小さくなかった」状態から「小さくある」状態になることも含み、それゆえ『パイドン』のコンテキストでは、性質変化、増大、減少も、「生成」および(もとあった性質や大きさが消滅するという意味で)「消滅」に含まれることになる。事実、96c7-d5 では、増大が生成の一形態として扱われている。以下のまとめの内には解釈上、問題があると思われる箇所もあるかもしれない。そのような箇所については後に論じるつもりである。[] の内に記したのは各箇所のキーワードになるとと思われる事項である。

(GF1) [生成と消滅] 生成と消滅についてその原因を徹底して調べなければならない (95e9-96a1)。

(GFE1) [生成と消滅と「ある」] 自然探求は、それぞれの事物がなぜ生成するのか、なぜ消滅するのか、またなぜ「ある」のかという各事物の諸原因を知っている点で、わたしには素晴らしいものに思われた (96a8-10)。

[若きソクラテスの自然探求] 生成の探求 (96b2-8)。消滅の探求 (96b9)。生成(増大)の原因に関するかつての考え (96c7-d5)。「より大きい」「より多い」の原因に関するかつての考え (96d8-e6)。

(G1) [生成] [不合理] 1と1の付加(接近)が2の生成の原因とは考えられないし、1の

分割(分離)が2の生成の原因とも考えられない——なぜなら、それらが原因であるとするなら、反対のことが同じ2の生成の原因であることになるから(96e6-97b3)。

(G2) [生成] なぜ1が生じるのか、自分が知っているのと納得できないでいる(97b3-4)。

(GFE2) [生成と消滅と「ある」] 一言で言えば、他の何ものについても、それがなぜ生じるのか、あるいは消滅するのか、あるいは「ある」のかということ、自分が知っているのと納得することは、探求のこの方法によってはできず、それに代えて何か別の方法を自分で適当にこね上げ、もう一方の方法を容認することは決してしない(97b5-7)。

(GFE3) [生成と消滅と「ある」] [善原因] もしもだれかが、それぞれの物事について、それがいかにして生成し、あるいは消滅し、あるいは「ある」のかという原因を発見しようと思うなら、それが「ある」こと、あるいは何であれ作用を受けたり、作用を及ぼしたりすることが、いかにして最善であるかというそのことを、それぞれの物事について発見しなければならない(97c6-d1)¹¹⁾。

[ソクラテスが善原因による説明を求める具体的事例] 大地は平らであるか、それとも球形であるか、また大地は中心にあるか(97d8-98a2)、諸々の星の速度、回帰点、作用、被作用(98a2-6)、現在のあり方(98a8-b1)、大地がとどまっていること(99b6-c6)。

(E1) [ある] [イデア原因] [分有原因] 美そのもの以外に何か美しいものがあるとすれば、その原因はほかでもない、かの美を分有する(metechei)ことのゆえに美しい(100c4-6)。

(E2) [ある] 何であれ、華やかな色や、形や、その他のこうしたものをもっているから美しいという説明は受けつけない(100c10-d2)。

(E3) [ある] [イデア原因] すべて美しいものは美によって美しい(100d7-8, e2-3)¹²⁾。

(E4) [ある] [イデア原因] 大きいものが大きいのは、またより大きいものがより大きいのは、大によってであるし、より小さいものがより小さいのは小によってである(100e5-6)。

(E5) [ある] 何ものかが頭によって別のものより大きいとか、何ものかが頭によって別のものより小さいとかいった説明は受けつけない(100e8-101a1)。

(E6) [ある] [イデア原因] より大きいものはほかならぬ大によって——大のゆえに——より大きい。またより小さいものはほかならぬ小によって——小のゆえに——より小さい(101a1-5)。

(E7) [ある] [不合理] 頭によってより大きいとかより小さいとか言う場合には、第一に、同じ一つのもの(頭)によってより大きいものがより大きくもあり、またより小さいものがより小さくもあるという不合理、第二に、頭は小さいにもかかわらず、その小さい頭によってより大きいものがより大きい——何か小さいものによってだれかが大きい——という不合理が生じるのではないかと恐れる(101a5-b2)。

(E8) [ある] [イデア原因] 10が8よりより多いのが、多によるのではなく——多のゆえではなく——、2によるとか、あるいは、2ペーキュスが1ペーキュスよりより大きいのが大によ

るのではなく、半分によると言うことは恐れ、差し控える(101b4-7)。

(G3) [生成] [分有原因] 1と1の付加によって2が生成する、あるいは分断によって2が生成すると言うことは警戒する。それぞれのものは、それが何を分有する(metashchêi)にせよ、その分有する当の相手の固有のあり方を分有することによって(metaschon)生成するのである。2になる原因は、ほかならぬ2の分有(metashesin)であり、2であろうとするものは、2を分有し(metaschein)なければならない。また1であろうとするものは、1を分有しなければならない。分断や付加等々の洗練された答えは放棄する(101b9-c9)。

(G4) [生成] [分有原因] アイデアのそれぞれが存在し、アイデアと異なるものは、アイデアを分取する(metalambanein)ことによってアイデアの名前をもつようになる(ischein)(102b1-2)。

(E9) [ある] [内在アイデアによる原因] シミアスがソクラテスよりより大きく、パイドンよりより小さいと言う場合、シミアスの内には大と小の両方がある。シミアスがソクラテスを凌駕している(より大きい)のは、たまたま彼がもっている大によってである。これはまた、ソクラテスがシミアスの大に対して小をもっているからでもある。またシミアスがパイドンによって凌駕される(より小さい)のは、パイドンがシミアスの小に対して大をもっているからである。シミアスが「小さい」とも「大きい」とも呼ばれるのは、前者の場合は、パイドンの大が凌駕すべく、その大に対して小を提供しているからであるし、また後者の場合は、ソクラテスに対して彼の小を凌駕する大を提供しているからである(102b3-d2)。

(F1) [退却か消滅か] [内在アイデアの場合] 同時に大かつ小であることをけっして容認しないのは大そのものだけではない。我々の内なる大も、小を受け入れ、凌駕されることはけっして認めず、小が接近する場合は退却するか、消滅するかのいずれかである(102d6-e3)。

(G5) [生成] [事物の場合] ソクラテスなら、小を受け入れ、なおソクラテスでありつづける(102e3-5)。

(F2) [退却か消滅か] [内在アイデアの場合] しかし、我々の内なる大についてはそれはない。また、我々の内なる小にしても、大きくなることも、大きいものであることもない。総じて、反対のものは、それ自体の性質を保ちつつ同時に反対になることも、反対であることもなく、反対をこうむる場合には、退却するか、消滅するかのいずれかである(102e5-103a2)。

(G6) [生成] [事物の場合] その場合、反対性をもつことによって反対性もっている名前と呼ばれる事物であれば、反対から反対になる(103a4-b4)。

(F3) [退却か消滅か] [内在・超越アイデアの場合] しかし、反対そのものは——我々の内なる反対も、自然の内なる反対も——けっして反対になることはなく、反対のものの生成を受け入れることはない((F2)から補うなら、そうしたものは、反対のものの接近に際して、退却するか、消滅するかのいずれかである)(103b4-c8)。

(F4) [退却か消滅か] [反対的アイデア以外の場合] 雪は熱を受け入れることはなく、熱が接近すれば、退却するか、消滅するかのいずれかである。火は冷が接近すれば、退却するか、消滅

するかのいずれかである。つまり、反対的アイデアだけがつねに自分の名前と呼ばれることを要求するわけではなく、反対的アイデアでなくても、存在するかぎりそのアイデアの形をもつものがある——3, 5等, 数の半分はつねに奇(数)と呼ばれるし, 2, 4等, もう一方の数の系列も, 偶(数)と同一ではないが, つねに偶(数)である。このようなものは, 自らの内にあるアイデアと反対のアイデアを受け入れることなく, そのアイデアが接近するなら, 消滅するか, 退却するかのいずれかである。例えば3は, 3でありながらも偶数になることを甘受するよりは, 消滅するか, あるいは他の何であれこうむるかのいずれかである(103c10-104c3)。

(F5) [退却か消滅か] [反対的アイデア以外の場合] それらは, 何であれ占拠するとき, 占拠されたそのものに自らのアイデアをもつよう強いるだけでなく, 何かと反対であるもののアイデアをもつように強いるものである¹³⁾。そのようなものには, その反対のアイデアと反対のアイデアはけっして近づくことはない。つまり, 反対のもの同士が互いを受け入れないだけでなく, 何のもとに行こうとも, そのものに対して何か反対のものをもたらすものも, もたらされるものと反対のものをけっして受け入れることはない((F4)から補うなら, そうしたものは, 反対のものの接近に際して, 退却するか, 消滅するかのいずれかである)(104c11-105b3)。

(F6) [退却か消滅か] [より洗練された答え] 何が身体/身体/数の内に生成するとき, 受け入れ側は, 熱く/病気に/奇数になるか——安全な答えは, 熱/病気/奇数性であるが, より洗練された答えは, 火/高熱/1(余分の1)である。何が身体の内内に生成するとき, 身体は生きているものとなるか。より洗練された答えによれば, それは魂である。魂は何を占拠しようとも, つねにそのものに生をもたらす。したがって魂は生と反対の死をけっして受け入れることはない((F4)から補うなら, 死の接近に際して, 魂は, 退却するか, 消滅するかのいずれかである)(105b5-e9)。

(F7) [消滅(および反対のものの生成)] [魂の不死・不滅証明完了] もしも万一偶数性を受け入れないものが不滅であるなら, 3は不滅であるだろう。万一熱/冷を受け入れないものが不滅であるなら, 熱/冷が雪/火に接近するとき, 雪/火は安全無事に退却し, 消滅することはないであろう。しかし, 奇数や奇数3は, 偶数性の接近に際して消滅し, その代わりに偶数が生成するかもしれない。これに対して, 不死なるもの(死を受け入れないもの)は不滅でもあり, したがって, 死が人間に接近するとき, 死すべき部分は死ぬ定めにあるが, 死を受け入れない魂は, 消滅することなく, ハデスへと退却するのである(105e10-107a1)。

Ⅲ. 分有と分取

我々は先に(P4)として, 我々の立場を次のように表明した——プラトンは, アイデアの分取が生成の原因であることは認めつつ(この点でアリストテレスのパラフレーズ(GC4b)は正しい), アイデアそれ自体が生成の原因であることは容認しないであろう。しかし, 今『パイドン』の議論を振り返り, 101cを含む(G3)(101b9-c9)を実際に見た後, なお, 我々は(P4)を堅

持できるであろうか。むしろ (G3) および (G4) 「アイデアのそれぞれが存在し、アイデアとは異なるものは、アイデアを分取することによってアイデアの名前をもつようになる」(102b1-2) は、プラトン自身、アイデアが生成の原因であると認めていたことを示唆するのではないか。なぜなら、『パイドン』のソクラテスは、何かが美しいことの原因を、(E1) において「美を分有することのゆえに」として特定した後、それを (E3) においては「美によって」と言い換えるが、しかしすぐ後には101cにおいてふたたびアイデアの分有に立ち返り、分有用語によってこんどは「ある」(例えば、美しくある)ではなく、生成を説明するのである。この事実は次の二つの想定を我々に促す。

- (A) プラトン自身、何かがFであることの説明として、「アイデアFによって」と「アイデアFを分有することのゆえに」の両方を、同じこと、どちらでも大差ないこととして考えていた。
- (B) プラトンは、アイデアFの分有 (A)に基づき、「アイデアF」と言い換えてもよい) は、Fであることの原因であるだけでなく、Fになること(生成)の原因でもあったと考えていた。

しかし、(A)は自明のことであろうか。ソクラテスが (E1) 「美を分有することのゆえに」を (E3) 「美によって」に置き換えるとき、彼は、その言い換えの理由として「具体的に美のアイデアが個物にどう関わっているか(それが臨在であるか、共有であるか、他のどんな関係であるか)という点については自分はもはや確言しない——ただ『すべて美しいものは美によって美しい』のみを、最も安全確実な答えとし、それにすがるべきでないようにする」と言っている(100d5-e3)。この言葉は、臨在、共有等の仕方ではアイデアと個物の関係を特定することは、ただ単純に「美のアイデアによって」と主張することほど安全確実ではないことを示唆する。だとすれば、分有もアイデアと個物の関係を特定する表現である以上、「アイデアFを分有することのゆえに」という原因の説明は、「アイデアFによって」ほどには安全確実でないことになる。

しかしこれに対しては、次のように反論されるかもしれない——プラトンは、101cと102bにおいて再度、分有用語を用いている、このことは、「アイデアFを分有することのゆえに」という原因の説明を、事実上プラトン自身が、「アイデアFによって」と同様、安全確実なものとして採用していることを含意する。そもそも「アイデアFによって」が安全確実であるとは、「華やかな色や、形や、その他のこうしたものをもっているから」という説明との対比において語られたことであった(100c10-d2)。それゆえ、「アイデアFを分有することのゆえに」も、そうした説明と比較すれば安全確実なこととして認められるのである。

確かに「華やかな色」等を指摘する説明に比べれば、「アイデアFを分有することのゆえに」は、安全かもしれない。しかし、今比較しているのは、「アイデアFを分有することのゆえに」と「アイデアFによって」とである。そして、この比較においては、ソクラテスは明らかに、「自分は後者を確言し、前者を確言することはもはやしない」(100d6-8)と言いきっている。このことは、

「アイデアFを分有することのゆえに」を確言するなら、それはもはや安全確実ではありえないことを意味する。したがって我々がなすべきことは、「アイデアFを分有することのゆえに」を安全確実な答えとして受け入れるのではなく、むしろ、なぜソクラテスが 101c において、安全確実性において劣るとみなした「アイデアFを分有することのゆえに」をあえて主張しているのか、ということである。

我々は暗黙の内に、101c でも 100c のアイデア分有原因説、あるいは 100d のアイデア原因説と同内容のことが語られていると考えているが、そもそもこの想定は正しいのであろうか。じつは、唯一アイデア原因こそが安全確実であると表明する前 (100d) と、後 (101c, 102b) とでは、次に示すとおり、使用されている用語に若干の違いが認められる。すなわち、表明以前に分有が語られる場面では、「xがFである (einai) のは、アイデアFを分有する (metechei) ことによってである」(100c5-6) と記されているのに対して、表明以後は、「xがFになる (gignomenon, genesthai, esesthai) のは、アイデアFを分有する (metaschon, metaschêi, metaschesin, metaschein) ことによってである」(101c2-7), 「アイデアFを分取する (metalambanonta) ことによって、xはアイデアの名前をもつ (ischein) ようになる」(102b1-2) と記されている。表明前は einai と metechein, 表明後は gignesthai, genesthai, esesthai¹⁴⁾, tèn epônumian ischein と metaschein, metaschesis, metalambanein であって、事態と原因のペアーが表明の前後で異なっているのである。

これに対しては、metechein と metaschein, あるいはそれが名詞化した metaschesis は、同じ動詞の現在形とアオリストの違いにすぎないし、また tèn epônumian tou F ischein = tèn epônumian tou F echein = F einai という等式が成り立つなら、「アイデアFによって」の確実性の表明の前後で、用いられている概念の間に実質的な相違はないと反論されるかもしれない。しかし、ギリシア語においては、現在形とアオリストの違いが意味の上で実質的な違いを構成するのである。以下に示す Smyth からの引用を参照されたい¹⁵⁾。‘1875. The present represents a present state, or an action going on at the present time…’ ‘1924. Ingressive Aorist. — The aorist of verbs whose present denotes a state or a continued action, expresses the entrance into that state or the beginning of that action.’ ‘1925. Most of the verbs in question are denominatives, and the forms are chiefly those of the first aorist: … a. Rarely with the second aorist: *eschon* took hold, took possession of, got, …’

パイドンは 102b2 において、gignesthai, genesthai, esesthai を tèn epônumian ischein という echein のアオリストを用いた表現で表わし、また同時にソクラテスが用いていた metaschein 関係の用語を、別の動詞 metalambanein (分取する) に置き換えているが、このとき彼は、ソクラテスによるアオリストの使用を正しく理解しているのである。それゆえ我々は、(G3) (101c) において metaschein 用語に「分有」の訳語を用いたが、しかし、metalambanein に当てた「分取」という訳語がより正確であった。プラトンは 101c において、1 や 2 を「分取すること」

が1や2の「生成」の原因であるとは語るが、1や2を「分有すること」が1や2の「生成」の原因であるとは語っていない。そしてこの場合の分取とは、先の Ingressive Aorist の用法において見たように、「分有状態に入ること、その状態を始めること」を意味する。つまりプラトンは、アイデアFの分有状態に入ることがFになること（Fの生成）の原因であると語っており、アイデアFの分有がFの生成の原因であるとは語っていないのである。したがって、「ある」ことの原因として「アイデアFによって」と「アイデアFの分有によって」が同じことを意味していても（ただし安全性は異なる）、「アイデアFによって」Fの生成が起こるとはけっして言えないことになる。

我々は、「アイデアFによって」こそが安全確実な原因の表明であるというソクラテスの言葉の後でも、*metechein* という動詞が依然として用いられているという事実には、それほど重きを置くべきではない。なぜなら、この動詞の使用によって表わされるであろうアイデアと個物の関係については、プラトン自身確言しないからである（100d4-8）。しかし、確実なことが言えないアイデアと個物の関係ではあっても、その関係を限定する一つの候補である動詞 *metechein*、およびそのアオリスト *metaschein*（およびそれから派生した名詞 *metaschesis*、あるいは同じ意味の別の動詞 *metalambanein*）を用いて、プラトンが明確に言い表わしていることがある。それは、「xがFである」の原因が‘x *metechei tou F*’で表わされるとするなら、「xがFになる」の原因は‘(x’s) *metaschesis tou F*’、あるいは‘x *metalambanei tou F*’であるということである¹⁶⁾。

しかし、「アイデアFによって」こそが安全確実な原因の表明である、とソクラテスに語らせた後、プラトンはなぜ再度、‘(x’s) *metaschesis tou F*’、‘x *metalambanei tou F*’という、どちらかと言えば危うい表現に帰るのであるだろうか。答えは明らかである——「アイデアFによって」では、「アイデアFとの関係に入ることによって」ということをどうしても表現できないからである。「関係に入ること」を表わすことは、唯一、（たとえその関係の具体的あり方については自信がなくても）その関係を特定する何らかの動詞を選び、そのアオリストを用いること、あるいは、まさにその関係に入ることの意味する別の動詞（*metalambanein*）を用いることによってのみ可能になるのである。プラトンは、アイデアと個物の関係が、臨在であるか、共有であるか、あるいは他の何らかの関係であるか、自分は確言しないと知っている。このことは、状況が許せば、「分有する」でなく、「臨在する」（*pareinai*, cf. 100d5）、「共有する」（*koinônein*, cf. 100d6）を用いてもアイデア原因説を表明することはできた、ということの意味する。しかし、それらの動詞には、個物がアイデアとの関係に入ることを表わす用語として、*metechein* が *metaschein*, *metalambanein* をもっているように¹⁷⁾比較的自然な対応語をもっていないという欠陥がある。だからこそプラトンは、100cにおいて「臨在する」や「共有する」ではなく、「分有する」を用いたのである。そしてさらに言うなら、アイデア原因論を述べるに際して、安全確実な「アイデアFによって」をはじめから導入することをせず、確実性について後に疑問を差し挟むことになる「分有する」を最初にもってきたのは、後に分有状態に入ることを表わす動詞形 *metaschein*、あるいは同じ意

味の動詞 *metalambanein* を導入する伏線であったと考えることができるだろう。とにかく、最初に最も安全確実な「アイデアFによって」を導入し、その後、それほど安全でないと自ら認める *metechein* をもってきて、「アイデアFとの関係に入ること」を示す *metaschein*, *metalambanein* 導入のための備えとするよりは、最初に *metechein* を導入し、その後、誤解のないように、その安全性について但し書きを加える方が叙述の順序としてはより適切であり、またどちらかと言えば、より安全な方法なのである。

かくしてプラトンは、(A) 何かFであることの説明として、「アイデアFによって」と「アイデアFを分有することのゆえに」は同じことである、(B) 「アイデアFによって」(あるいは「アイデアFを「分有」することのゆえに」)は、Fであることの原因であるだけでなく、Fになること(生成)の原因でもある、の両方を拒絶するであろう。

そして実際、次の理由によっても、プラトンはアイデアを生成の原因とする立場は拒絶せざるをえない。

IV. 原因論の三つの法則

ソクラテスが自然学者たちの賢い原因(100c10)を斥けるとき、彼は(G1)と(E7)に記した不合理に着目しているように思われる。その箇所から我々は、原因論に関するソクラテスの三つの法則とも言うべきものを引き出すことができる¹⁸⁾。

もしもxが何かFである原因であるとするなら(Fの反対はun-F),

(法則1) xはun-Fであってはならない(101a8-b2),

(法則2) xの反対は、何かFである原因であってはならない(97a7-b3),

(法則3) xは、何かun-Fである原因であってはならない(101a6-8)。

これによれば、もしもxが何か生成的である原因であるとするなら、法則1により、xは生成的の反対(永遠的)であってはならない。したがって、永遠的なアイデアは、何か生成的である原因であってはならないことになる。

このことから、アリストテレスがプラトンのアイデア原因説に対して加える批判について、我々は次のように考えることができる。(P5)に記したアリストテレスがプラトンを批判する際に用いる論点「アイデアは不動の原理であり、動(変化)の原因たりえない」は、プラトン自身容認するところである。プラトンにとってアイデアは「ある」の原因であり、かくしてアイデアは、変化の結果として「Fである」こと——あるいは、何らかの変化が目的とする「Fである」状態——については、原因としてそれを説明するものとみなされるかもしれないが、Fでない状態からFである状態に移行する動(変化)については、それを引き起こす原理として採用することのできないものなのである。その意味で、「永遠の存在であるアイデアは、変化を引き起こす原理が別に与

えられなければ役に立たない」(『形而上学』第12巻6章 1071b14-17) ((P5) を参照) というアリストテレスの裁定は、まさに彼がプラトン『パイドン』から正しく読み取ったところである。しかし、アリストテレスが見過ごしたことが一つある。それは、プラトンがその『パイドン』において、まさに「変化を引き起こす原理」を与えている、ということである。

註

- 1) アリストテレスは *eidos* をある場合にはプラトンの「イデア」を指すため、別の場合には自らの「形相」を指すために用いる。ここではプラトンのイデアを指すことが明らかである場合は「エイダス」と訳し、アリストテレスの「形相」に相当する場合は「エイダス(形相)」と訳す。また「形(形相)」と訳したのは *morphê* である。なお、言うまでもないことであるが、『パイドン』でソクラテスが表明するイデア原因説の立場は、歴史上のソクラテスの立場というよりはむしろ、プラトンがソクラテスの思想と生活の延長上に自らの立場として採択するにいたった立場である。
- 2) この違いは、しばしば指摘されているように、『形而上学』第1巻ではアリストテレスがなおプラトニストとして、第13巻ではプラトニストの立場を捨てて批判を行なっていることによる。Cf. W. D. Ross, *Aristotle's Metaphysics*, vol.1 (Oxford, 1924), 190.
- 3) 批判それ自体は 336a12 まで続く。
- 4) Cf. J. Annas, 'Aristotle on Inefficient Causes', *Philosophical Quarterly*, 32 (1982), 311; cf. 324-5. こうした立場に対する詳細な批判としては、G. Fine, 'Forms as Causes: Plato and Aristotle', in A. Graeser (ed.), *Mathematics and metaphysics in Aristotle* (Bern/Stuttgart, 1987), 76-81 がある。
- 5) Annas, *op. cit.*, 312.
- 6) J. Barnes の *The Revised Oxford Translation* (Princeton, 1984) も、また E. S. Foster の *Loeb Classical Library* 訳も同様である。
- 7) H. A. Joachim, *Aristotle On Coming-to-be & Passing-away (De Generatione et Corruptione)*, *A Revised Text with Introduction and Commentary* (1922, Oxford), 249. ギリシア語はローマ字にうつした。
- 8) H. Cherniss, *Aristotle's Criticism of Plato and the Academy* (New York, 1962), 380 の 'so that he necessarily believes the ideas to be the causes both of generation and destruction (cf. *Phaedo* 100C-E, 101C)' は (iv) に相当する。(iv) は C. J. F. Williams, *Aristotle's De Generatione et Corruptione* (Oxford, 1982) による翻訳である。
- 9) Cf. Annas, *op. cit.*, 'at 101c3-7 we are told that Forms explain not only things' being one or two in number, but their becoming so' (318); 'He [Aristotle] is right in that Plato does talk this way at 101b9-c7: the only real explanation of a thing's coming to be anything is participation in the Form' (324). また註 8 に記した Cherniss からの引用も参照。
- 10) Cherniss, *op. cit.*, 377 n.201 は、カッコの部分アイデア論者からの引用と見るよりはアリストテレスの推論と見る。この点については断定を避けたい。
- 11) 本訳と同様の訳し方をしているのは、H. Tredennick, *Plato. The Last Days of Socrates* (Penguin Books, 1954); R. Hackforth, *Plato's Phaedo* (Cambridge, 1955); D. Gallop, *Plato Phaedo* (Oxford, 1975)。他の訳者はそのほとんどが、「それが、いかなる仕方でも『ある』のが、あるはいかなる仕方でも何であれ作用を受けたり、作用を及ぼしたりするのが、最善であるのか」というそのことを、そ

それぞれの物事について発見しなければならない」という仕方で訳している。本文の訳によれば、「現在の状態、あるいは現在それぞれの物事が互いに作用を及ぼし、また作用を受け合っている事態は、ともかくも最善と認められる——知性(ヌゥス)がそのように配置しているはずであるから。しかし、どうしてそれが最善であるのかが分からない」という意味になり、もう一方の訳によれば、「それぞれのもの(例えば大地の形や位置)がどのようにあるのが最善であるのかが分からない」という意味になる。しかし、「少なくとも知性が秩序づけているからには、いかなる仕方であれ最善であるような仕方で、すべてのものを秩序づけ、個々のものを配置している」(97c4-6)、「まず大地が平らであるか、あるいは球形であるかを語り、…さらに原因と必然性を説明してくれるであろう——『より善い』ということ、すなわち、大地がそのようなあり方をしているのがより善いということ〔あるいは、大地がそのようなあり方をしているのがなぜより善いかということ〕を説明してくれるであろう。また大地が中心にあると彼が言うのであれば、それが中心にあるのがいかにしてより善いことであるのかをさらに説明してくれるであろう」(97d8-e3)等々の記述は本文の訳が採用されるべきことを示す。特に「それらが現在そうあるようなあり方であるのが最善である」(98a8-b1)を参照。また98a5で *pêi* が *ameinon* にかかっていると考えるのがよいとするなら、*hopêi beltiston* (97c8) も離さずに読む方がよいと思われる。

- 12) 100d8, e3 において *gignetai* を含む写本もあり、例えばビュデ版テキスト *Platon, Oeuvres Complètes, Tome IV-I^{re} partie, Phêdon, Texte Établi et Traduit par P. Vicaire* (Paris, 1983) は、100d8 においてこの語を読む。しかし、(E2) の後を受け (E4) に続くコンテクストに、「生成」が入ってくる余地はないはずである。読まない解釈については J. Burnet, *Plato Phaedo* (Oxford, 1911), note on 100d8 を参照。
- 13) 104d3 の *autôi* の代わりに *au tôi* を読む。104d1-3 は構文の取り方が二とおり可能であり、「それらは、何がそれらを占拠するにせよ、その占拠するものが自らのアイデアをもつよう強いるだけでなく、何かと反対であるもののアイデアをももつように強いるものである」とも訳しうる。本文に記した読み方は、Burnet, *op. cit.*; Hackforth, *op. cit.*; R. S. Bluck, *Plato's Phaedo* (London, 1955); D. O'Brien, 'The Last Argument of Plato's *Phaedo*. I', *Classical Quarterly*, 27 (1967), 214-6 も採用する読み方。もう一方の読み方は、Tredennick, *op. cit.*; H. Erbse, 'Philologische Anmerkungen zu Platons *Phaidon* 102a-107a', *Phronesis*, 14 (1969), 98 n.1; E. Hartman, 'Predication and Immortality in Plato's *Phaedo*', *Archiv für Geschichte der Philosophie*, 54 (1972), 223 n.11; Gallop, *op. cit.*; C. J. Rowe, *Plato Phaedo* (Cambridge, 1993) の読み方である。この問題は「より洗練された答え」(105b-c) で語られる原因がアイデアに相当するか、個物に相当するかという問題とも関わり、後に取り上げることになる。目下のところは「反対を受け入れず、消滅するか、退却するかのいずれかであるもの」の定義は、104d1-3 と 105a3-5 において与えられているが、後者において「反対を受け入れない」とされている事物は「反対の性質を与えるもの」であって、「反対の性質を与えられるもの」ではないことを、本文で記した読み方を採用する根拠として挙げておく。
- 14) *esesthai* という未来形は未来の状態が現在とは異なること、すなわち変化を表わす。
- 15) Cf. H. W. Smyth, *Greek Grammar*, revised by G. M. Messing (Cambridge, Massachusetts, 1920), 421, 430. ギリシア語はローマ字にうつした。なおわれわれの論点については、論旨に多少の相違はあるが、Fine, *op. cit.*, 102 も参照。
- 16) プラトンの他の諸対話篇における用例については次のとおり——
 'x *metechei* tou F' → 「x が F である」: 『饗宴』211b1-5; 『国家』472b8-c2, 476d1-2; 『パルメニデス』129a8-9, b3-4, 5-6, c5-d2, 130b3-5, 131c6-7, 132c9-11, d9-e4, 133a2-3, 5-6, (133d2-5) 134b11-12, c10-11.
 'x *metalambanei* tou F' → 「x が F になる」「x が F の名前をもつようになる」: 『パルメニデス』

129a3-7, 130e5-131a2.

なお、『パルメニデス』133a2-3では「エイドスが自分を分有するものに類似するようになる(gignêtai)のであれば」と記されているが、その意味は「エイドスを分有するものは、エイドスに似ている(einai)が、それに加えて、エイドスが自分を分有するものに類似するようになる(gignêtai)のであれば」という意味であり、したがって「xがFである」グループに加えることができる。また133d2-5をカッコでくくったのは、これを個物の分有の例に数えてよいかどうか不明であるからという理由による。

- 17) さらにアリストテレスが(GC4b)において用いた名詞「分取」(metalêpsis)もある。
- 18) D. Sedley, 'Platonic Causes', *Phronesis*, 43 (1998), 121. また D. Bostock, *Plato's Phaedo* (Oxford, 1986), 137, 151; Annas, *op. cit.*, 314, 316; G. B. Matthews and T. A. Blackson, 'Causes in the *Phaedo*', *Synthese*, 79 (1989), 584 も参照。ここでの定式化は Sedley のそれを応用したものである。

(未完)